

# 名農大百科～時代を先取る New power～

クラブ員代表者会議 東北ブロック連盟 青森県立名久井農業高等学校

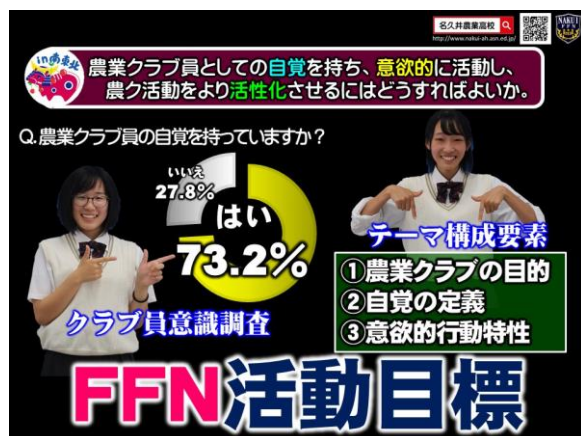
生物生産科	2年	中村	綺菜
生物生産科	2年	長森	舞
生物生産科	2年	元木	萌羽
生物生産科	2年	越後	舞香
環境システム科	3年	野田	志龍
生物生産科	3年	寺澤	駿希

## 1 東北ブロック発表課題の分析とFFN2019の活動目標設定

昨年10月、平成最後の役員改選で第70代農業クラブ役員に任命された私達は、「新しい時代に、新しい気持ちで、新しい農業クラブを！」を合言葉に、結束を固めました。早速、役員定例会にて、クラブ員へのアンケート調査をもとに発表テーマを分析し、次の3つの構成要素を抽出。これらを紐解くことで、活動のヒントを探りました。

まずは農業クラブの目的を再確認。日連会則では、将来の産業にふさわしい力、クラブ員同士の学び合い、地域活動と国際理解、の3つを示しています。次に、自覚の定義。自覚とは自分の立場や能力、自分自身の値打ちや、現在の自分の状態を認識することであり、文字通り「自分を覚える」ことを指します。3つ目は意欲的な行動特性。対象となる行動が、直ぐに役に立つと分かっていること、将来、役に立つことが分かっていること、人から認められることの3つのケースが挙げられました。

以上まとめてみると、あらゆる時間軸と空間軸において、農業クラブはクラブ員にとって自分を写し出す鏡であるべきです。これを踏まえ、本校の活動目標を「スピード・アクション・感動、名農新時代！」に決定。それでは新時代の名農を一挙大公開。



## 2 地域代表の自覚を促す活動

まず単位クラブに即した自覚の形成。名農では、昭和、平成、令和と47年間、「緑育心」をスローガンに、地区分会活動ではそれぞれの地元に花を植えてきました。華麗に咲く花はまさにクラブ員の魂そのものです。

地元愛に溢れた結末に、更なる彩りを求め、農業に関わる地元ならではの自慢を募集。特に民俗学的価値の高いものをポスターで紹介。クラブ員同士の地元理解をはたらきかけ

ました。

地元生産組合の根強い声から県立ではなく、組合立でスタートしたことも忘れてはいけません。地域農業への恩を農作業という分かりやすいカタチで支援。地域創生を見据えたこの活動は、県立ながら町立学校としてのプライドまでを育てます。

地域代表の自覚は、さらに深いところまで。名久井を名乗る学校として、名久井岳の問題は無視できません。「名久井岳・植樹プロジェクト」の依頼を受けた私達は、故郷の環境を大きな視点で捉えたいと八戸水産高校を招待。海と森が寄り添う未来のための連携に、多くのマスコミから注目を集めました。

### 3 クラブ員の意欲を掻き立てる役員活動の在り方とその実践

次は役員としての自覚。これは先輩役員から受け継がれる長期プロジェクト。名農でさえ非農家出身が過半数を占める今、次世代に農業の魅力を発信していくことは私達の使命です。本校主催コンテストである第9回アグリチャレンジでは、かつて、グランプリ覇者で、史上最多出場記録を持つあの子どもが、役員となり、司会を務める、という時代に突入したのです。

自覚の次は意欲を高める活動。入学祝いは栽培キットとユニークですが、栽培は1ヶ月にもおよびます。そこで今年度は、スプラウトに変更。役員指導の下、入学式のわずか30分後に播種。見事10日で収穫を迎えるなど、史上最速の農ク活動で感動を届けました。QRコード付きティッシュの効果も絶大です。ティッシュ配布後のホームページ閲覧数は急上昇。これは即ち、農業クラブに対する意欲の裏付けです。



新会員へのはたらきかけはまだまだ続きます。スプラウト栽培に成功した新会員の中には「早くプロジェクト活動がしたい！」という好奇心の卵達があります。そこで、役員が先生役となり、学科の枠を超えた1年契約の研究チームを募集。7名が名乗りを上げ、現在9月の学会デビューを目指し奮闘中です。

研究内容を短時間で伝える手段として、本校は11年前に、県内農業高校で初めてポスター発表を導入しました。この直接議論式発表は学会発表から持ち込まれた文化であり、ポスター発表導入をきっかけに、クラブ員の学会挑戦が本格化しました。今では名農の発表文化が波及し、県内農業高校にも広がりました。

アグリマイスターはクラブ員の努力の足跡。合格率20%の農業技術検定2級に5名のクラブ員が合格。全国大会農業鑑定でも全区分で優秀賞を獲得するなど、クラブ員の個の活躍は目覚ましく、2年連続で学校表彰を受賞しています。しかし、定期総会では「多く



のクラブ員が頑張っているが、途中経過が見えにくい。」と、鋭い指摘がありました。そこで、クラブ員の取得状況をビジュアル化。「後、何点で認定が受けられるのかが分かりやすい。他のクラブ員にも負けていけない。」と、クラブ員同士の競い合いを可能にしました。

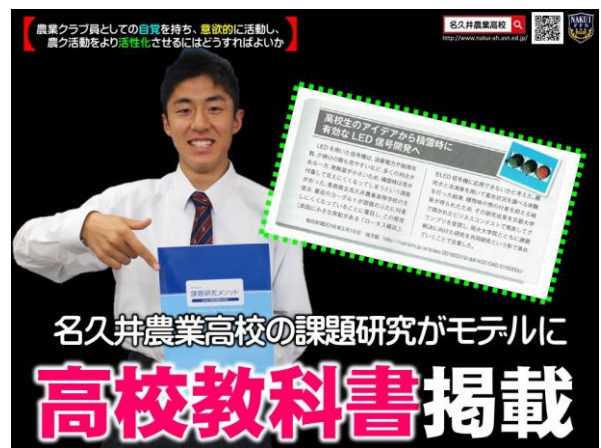


#### 4 国際理解を身近に実感させる仕掛け

多くの海外派遣実績を持つ本校も、近年は停滞気味。そこで、「派遣が難しければ、受入を！」と、クラブ員宅に農業クラブ発祥のアメリカから10名の留学生がホームステイ。この受入により、多くのクラブ員の異文化交流が実現しました。

ユニセフ・キャラバンキャンペーンでは、VTRを通して世界の子供たちがおかれている状況を学習。あまりにショッキングな事実により、クラブ員一同、心を打たれました。しかし、講演終盤にSDGsが紹介されると、「農業を学んでいる私達にも何かできるはず！」と、自覚と決意を新たにしました。

#### 5 クラブ員を大きく羽ばたかせるプロジェクト活動の実践と成果



以上ここまでをまとめてみると、素早い感動を求めて取り組んだ結果、クラブ員の自覚や意欲が成熟し、単位クラブは盛り上がりを見せています。やはり、スピードはクラブ員にとって大きな薬です。しかし、今のクラブ員には刺激が足りません。より大きな舞台で、より大きなリアクションを求めた、より大きな挑戦が必要です。

それを可能とするのが日本一の研究時間を持つ本校のプロジェクト活動です。3年前からドローンを使った溶液受粉に取り組む果樹班は今もマスコミに引っ張り尻。地域への普及を目指したアイデアは様々なコンクールで上位を独占中。この春からは、農水省ホー

ムページへ掲載されるなど、スマート農業の先駆けとして注目を浴びています。

県内唯一、水耕温室を完備する本校は、業界、期待の星です。担当する施設園芸班は、民間企業の全面的なバックアップの下、タブレット端末を活用したリモートセンシングを行っています。水耕では邪道と言われたショウガの栽培にも成功するなど、業界に波風を立てています。

数々のノーベル賞を輩出してきた京都大学と連携できるのも名農の強み。4年前から共同研究を行ってきた「雪国向けLED信号機の開発」も大詰め。試行錯誤を重ねた信号機が完成に近づき、いよいよ実証実験に動き出すところです。

そして研究実績も確かです。昨年度の受賞数は30点にもものぼります。FFJ検定特級取得数は堂々の日本一！確実にクラブ員の努力が実を結んでいます。

これらの実績は全国農業高校ホームページコンテストでも表れています。一次審査では全国の農業高校から上位48校に選ばれ、本戦では未来賞を受賞。審査ポイントである「夢のある農業の実践」が高く評価されたものと思われま

そして、とうとう本校のプロジェクトが世界で勝負する日が来たのです。青少年ストックホルム水大賞世界大会は6年ぶり2回目の出場。日本代表が決まってからは京都大学の先生指導の下、連日、練習に明け暮れました。そして、迎えた本番。スウェーデンで、堂々と英語で発表する姿はまさに圧巻でした。強豪国を抑え、なんと準グランプリの獲得です。この名農史上最高の活躍に学校全体が歓喜の渦に包まれました。世界2位の快挙に、連日取材が殺到するなど、一躍名農の名が世界に広まりました。

このような、本校の前衛的で実験的な研究スタイルが今、大きな注目を集め、なんと高校の課題研究の教科書に掲載。農業高校だけでなく、全国の高校生の課題研究の在り方に一石を投じることもできました。

## 8 発表課題への結論と今後の課題

まとめてみると、次の3つのことが分かりました。自覚や意欲を促すためには、見やすい・分かりやすい即効性のある感動体験が必要であること、感動体験の蓄積は、プロジェクト活動飛躍の布石となること、そして、それらの集大成として、挑戦的な単位クラブ集団と化すと結論づけたのです。

今後の課題は、持ち味のスピードに更なる磨きをかけ、より短期間で活性化を図ることです。先日、県に提案した2つのプランが採択され、7月には防災サミットへ青森県代表で派遣されるなど、私達役員も、新しい挑戦に向け、走り出しています。今後も、時代を先取り、地域の即戦力となる農業クラブを目指すことを誓い、発表を終わります。

農業クラブ員としての自覚を持ち、意欲的に活動し、農ク活動をより活性化させるにはどうすればよいか

名久井農業高校

# まとめ

- ①即効性のある感動体験
- ②感動蓄積はプロ飛躍に
- ③挑戦的クラブ集団と化す

## 発表課題の結論

農業クラブ員としての自覚を持ち、意欲的に活動し、農ク活動をより活性化させるにはどうすればよいか

名久井農業高校

# 今後の課題

刺激 “速さを強さに” 衝撃

より短期間で活性化

## “ハイスペック農ク”